

琉球大学学術リポジトリ

琉球沖永良部語正名方言の条件文

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2015-06-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ハイス・ファン・デル・ルベ, Gijs van der Lubbe メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/31116

【研究論文】

琉球沖永良部語正名方言の条件文

ハイス・ファン・デル・ルベ*

Conditional Sentences in the Masana Dialect of Okinoerabu Ryukyuan

Gijs van der Lubbe*

要旨

本稿であつかう対象は、琉球沖永良部語正名方言における因果関係を表現しているつきそい・あわせ文である。つきそい文の述語になる形式がさまざまである。条件をあらわすつきそい文の述語になる形式が7つあり (-iwa, -to, -tara, -tukja, -kja, -gafara)、日琉語族のなかでは、数が著しい。本稿は、形式ごとに、原因・理由 (-tu(ni))、契機 (-tu)、条件 (-iwa, -to, -tara, -tukja, -kja, -gafara)、うらめ (muN, -taNte)、ゆずり (-abamu, -timu) のように用法をとりだし整理した。さらに、共通する用法をもつ形式について、言語接触の結果の可能性のあることを述べた。

Abstract

This study is about complex sentences that express cause and effect in the Masana dialect of Okinoerabu Ryukyuan. There are several forms that can function as the head of an adsentential clause. There are seven verb forms alone that can head a conditional clause (-iwa, -to, -tara, -tukja, -kja, -gafara, -tu). This is quite numerous for a Japonic language. The forms were classified as causal (-tu(ni)), temporal (-tu), conditional (-iwa, -to, -tara, -tukja, -kja, -gafara), adversive (muN, -taNte), and concessive (-abamu, -timu). As for the forms that have a similar function, this may be the result of language contact.

*琉球大学大学院人文社会科学部研究科博士課程後期。Ph.D. Student, Graduate School of Humanities and Social Sciences, University of the Ryukyus.

はじめに

琉球諸語の条件文の研究としては、与論島朝戸方言と国頭村宇嘉方言をとりあげる町1983、宮古保良方言をとりあげる狩俣2007、沖縄語をとりあげる狩俣の「はじめての人のためのシマクトゥバの文法」（出版未定）があるが、琉球諸語の条件文の研究は、現在まだすくない。

本稿の資料は、著者が現地調査によって得たものである。資料提供者（話者）は、M.F. (S11 女性)、H.T. (25 男性)、N.N. (S17 男性) の3人である。

つきそい文の出来事は、いいおわり文にさしだされる出来事の実現の根拠としてはたらくのだが、「根拠」というのは、原因、条件、理由、動機、目的、予定、前提、仮定、契機とさまざまある。本稿では、いいおわり文にさしだされる出来事の実現のための原因や条件などをつきそい文にさしだすとき、つきそい文の述語としてあらわれる文法形式を記述する。

1. 条件文にあらわれる述語形式

I. 原因、理由、条件、契機などをあらわす形式

numiNtu/numiNtuni (のむから、のむので)

numiwa/numja (のめば)

numuto (のむと)

numiNtara (のむなら、のんだら)

numiNtukja (のむなら、のんだら)

numiNkja (のむなら、のんだら)

numiNgaJara (のむなら、のんだら)、

nudatu (のんだら)

II. ゆずり状況やうらめ原因などをあらわす形式

numinu muN (のむのに)

nudaNte (のんでも、のんだとしても)

nudimu (のんでも)

numabamu (のむにしる)

図 1. 沖永良部語正名方言の条件形の一覧

	肯定	否定
原因	numiNtu (ni)	numaNtu (ni)
条件	numiwa (numja) numuto numiNtara numiNtukja numiNkja numiNgaJara	numaNnja numaNto numaNtara numaNtukja numaNkja numaNgaJara
契機	nudatu	×
うらめ	numinu muN nudaNte	numanu muN ×

ゆずり	nudimu numabamu	numadanamu ×
-----	--------------------	-----------------

numiNtu/numiNtuni (のむから、のむので) は、原因と理由をあらわす。-tu(ni)という接辞が動詞、形容詞、コピュラの第二叙述形につく。肯定や否定、現在や過去、またはアスペクトをあらわす形式がすべてこの-tu(ni)原因形をとる。

numiwa (のめば) は、条件と契機をあらわすことができる。検定教科書文法のいわゆる已然形に接尾辞の-baがつき、日本語のノメバに相当する。-iwa条件形の音声的なバリエーションとして-ja条件形がある。次のとおりである。

買えば	ho:riwa	→	ho:rja
飲めば	numiwa	→	numja

継続をあらわすシテオリ相当形式も-iwa条件形をとるが、シタ相当形式である過去形は、-iwa条件形をとらない。なお、つきそい文の述語が否定形をとっているとき、-iwa条件形のバリエーションとして-nja条件形がある。

しない	firaN(第二叙述形)+-nja	→	firaNnja
見ない	mjaN(第二叙述形)+-nja	→	mjaNnja

numuto (のむと) も、条件と契機をあらわすことができる。-toという接尾辞がいわゆる旧連体形につく。旧連体形というのは、日本語の連体形に相当するものである。動詞numimu (のむ) の旧連体形は、numu-であり、現代沖永良部語正名方言においては、日本語のノムとことなり独自の形式としては存在しないが、接尾辞が修飾する語幹としては機能する。シテオリ相当形式も-to条件形をとるが、シタ相当形式は、-to条件形をとらない。なお、形容詞は、-to条件形をとらない。

numiNtara, numiNtukja, numiNkja (のむなら、のんだら) は、みな条件と契機をあらわすことができ、-tara, -tukja, -kjaは、動詞、形容詞、コピュラの第二叙述形につく。肯定や否定、現在や過去、またはアスペクトをあらわす形式がすべてこの3つの条件形をとる。図2のとおりである。

numiNgaŋara (のむなら) は、条件をあらわし、コピュラと動詞と形容詞の第二叙述形につく。肯定や否定、現在や過去、または継続をあらわす形式がすべて-gaŋara条件形をとる。図2のとおりである。

nudatuは、契機をあらわすことができる。過去をあらわす-ta-という形態素に直接-tuがつく。図2のとおりである。

図2.動詞の形態論的なタイプと原因、理由、条件、契機などをあらわす形式

	みる	おきる	える	まける	かう	おく	とぶ
叙実法1	mi:mu	?uimu	ji:mu	me:mu	hoimu	?ukki mu	tubimu
叙実法2	miN	?ui	jiN	meN	hoi	?ukkiN	tubiN
-tu(ni)原因形	miNtu(ni)	?uitu(ni)	jiNtu(ni)	meNtu(ni)	hoitu(ni)	ukkiNtu(ni)	tubiNtu(ni)

-iwa 条件形	miwa (mi:wa)	ʔuiwiwa (ʔuija)	jiwiwa (ji:ja)	me:riwa (me:rja)	ho:riwa (ho:rja)	ʔukkiwa (ʔukkja)	tubiwa (tubja)
-nja 条件形(否定)	njaNnja	ʔuiraNnja	jiraNnja	me:raNnja	ho:raNnja	ʔukkaNnja	tubaNnja
-to 条件形	nju:to	ʔuimoto	ji:uto	me:ruto	ho:ruto	ʔukkuto	tubuto
-tara 条件形	miNtara	ʔuitara	jiNtara	meNtara	hoitara	ʔukkiNtara	tubiNtara
-tukja 条件形	miNtukja	ʔuitukja	jiNtukja	meNtukja	hoitukja	ʔukkiNtukja	tubiNtukja
-kja 条件形	miNkja	ʔuikja	jiNkja	meNkja	hoikja	ʔukkiNkja	tubiNkja
-ga□ara 条件形	miNgaJara	ʔuigaJara	jiNgaJara	meNgaJara	hoigaJara	ʔukkiNgaJara	tubiNgaJara
-tu 契機形	mittJatu	ʔuitatu	jittatu	me:tatu	ho:tatu	ʔuttJatu	tudatu

	もつ	しぬ	する	くる	いる	ある	わかい	である
叙実法 1	muttimu	ʔinimu	ʔimu	ki:mu	wu:mu	ʔa:mu	wakasamu	×
叙実法 2	muttiN	ʔiniN	ʔiN	kiN	wuN	ʔaN	wakasaN	jaN ⁻¹
-tu(ni)原因形	muttiNtu(ni)	ʔiniNtu(ni)	ʔiNtu(ni)	kiNtu(ni)	wuNtu(ni)	ʔaNtu(ni)	wakasaNtu(ni)	jaNtu(ni)
-iwa 条件形	muttiwa	ʔiniwa (ʔinja)	ʔiriwa (ʔirja)	kuriwa (kurja)	wuriwa (wurja)	ʔariwa (ʔarja)	wakasariwa (wakasarja)	jariva (jarja)
-nja 条件形(否定)	muttaNnja	ʔinjaNnja	ʔiraNnja	ʔuNnja	wuraNnja	naNnja	wakasa naNnja	ʔanaNnja
-to 条件形	muttuto	ʔinuto	ʔiruto	kuruto	wuruto	ʔaruto	×	jaruto
-tara 条件形	muttiNtara	ʔiniNtara	ʔiNtara	kiNtara	wuNtara	ʔaNtara	wakasaNtara	jaNtara
-tukja 条件形	muttiNtukja	ʔiniNtukja	ʔiNtukja	kiNtukja	wuNtukja	ʔaNtukja	wakasaNtukja	jaNtukja
-kja 条件形	muttiNkja	ʔiniNkja	ʔiNkja	kiNkja	wuNkja	ʔaNkja	wakasaNkja	jaNkja
-ga□ara 条件形	muttiNgaJara	ʔiniNgaJara	ʔiNgaJara	kiNgaJara	wuNgaJara	ʔaNgaJara	wakasaNgaJara	jaNgaJar a
-tu 契機形	muttJatu	ʔidʒatu	ʔatu	kittJatu	×	×	×	×

nudimu (のんでも) は、動詞、形容詞、コンピュータのシテ相当の中止形に助詞 mu (も) がついた形で、ゆずり状況的なつきそい文の述語になる。

沖永良部語正名方言においては、否定形式には、シテ相当の中止形がこのような場合にはあられず、-dana 中止形がもちいられる。-dana 中止形に助詞 mu をくみあわせて、ゆずり状況的なつきそい文の否定述語になる numadanamu (のまなくても) になる。

numabamu (のんでも) も、ゆずり状況的なつきそい文の述語になることがある。検定教科書文法のいわゆる未然形に接尾辞の-ba がつき、日本語のノマバに相当する。

numinu muN (のむのに) は、うらめ原因をあらわすつきそい文の述語になる。muN は、名詞発生の接辞であるため、動詞、形容詞、コンピュータの連体形にくみあわされる。

nudaNte (のんでも、のんだとしても) は、ゆずり状況的なつきそい文の述語になる。動詞の過去形に-te がついた形である。

図 3 動詞の形態論的なタイプとゆずり状況やうらめ原因などをあらわす形式

	みる	おきる	える	まける	かう	おく	とぶ
叙実法 1	mi:mu	ʔuimu	ji:mu	me:mu	hoimu	ʔukkimu	tubimu
-timu 形	mittJimu	ʔuitimu	jittimu	me:timu	ho:timu	ʔuttJimu	tudimu
-adanamu 形	nja:danamu	ʔuiradanamu	jiradanamu	me:radanamu	ho:radanamu	ʔukkadanamu	tubadanamu
-abamu 形	nja:bamu	ʔuirabamu	jirabamu	me:rabamu	ho:rabamu	ʔukkabamu	tubabamu
連体形+muN 形	mi:nu muN	ʔuinu muN	ji:nu muN	me:nu muN	hoinu muN	ʔukkinu muN	tubinu muN
-tante 形	mittJaNte	ʔuitaNte	jittaNte	metaNte	ho:taNte	ʔuttJaNte	tudaNte

	もつ	しぬ	する	くる	いる	ある	わかい	である
叙実法 1	muttimu	finimu	fi:mu	ki:mu	wu:mu	?a:mu	wakasamu	×
-timu 形	muttfimu	fidʒimu	fi:mu	kittfimu	wuttimu	?attimu	wakasattimu	jattimu
-adanamu 形	muttadamamu	finjadanamu	firanadamu	ɸu:danamu	wuradanamu	na:danamu	wakasa na:danamu	?anadanamu
-abamu 形	muttabamu	finjabamu	firabamu	ɸu:bamu	wurabamu	?arabamu	wakasa ?arabamu	jarabamu
連体形 +muN 形	muttinu muN	fininu muN	fi:nu muN	ki:nu muN	wu:nu muN	?a:nu muN	wakasanu muN	janu muN
-tante 形	muttfaNte	fidʒaNte	faNte	kittfaNte	wuttaNte	?attaNte	wakasattaNte	jattaNte

2. 原因的な条件をあらわすつきそい・あわせ文

原因的な条件をあらわすつきそい・あわせ文とは、ある出来事を事実的な根拠としてつきそい文にさしだして、その結果、実現した出来事をいいおわり文にさしだすことで、話し手が2つの出来事を原因・理由の因果関係としてむすびつけるつきそい・あわせ文である(奥田 1986)。個別的な動作や状態のあいだの原因・結果の関係をあらわすのに、**-tu(ni)**原因形がもちいられる。つきそい文でもいいおわり文でも過去、現在、未来のリアルな出来事がさしだされるため、つきそい文でもいいおわり文でも述語は、テンス・アスペクトによる形式がとられる。

numiNtu(ni) (のむから) nudaNtu(ni) (のんだから)
nuduNtu(ni) (のんでいるから) nudutaNtu(ni) (のんでいたから)

2-1. 原因をあらわす接辞-tu(ni)

動詞も形容詞もコンピュータも**-tu(ni)**原因形をとることがある。話者の内省によると、今まで集めた用例で**-tu**になっているところを**-tuni**にかえても、違和感もないし、意味も変わらないということである。

次の用例では、未来の出来事がつきそい文にさしだされ、つきそい文の述語が非過去形になっている。3)は、いいおわり文が意志勧誘形であらわれ、はたらきかけ文になっている。

- 1) <oraNda>nu jiNga=nu <ʃo:sa> fi:ga kiNtuni hatte=gatfi=wa ?ikaramu
オランダの男が調査しに来るから、畑には行けない。
- 2) tudʒi=wa na:tʃa naɸa=gatfi ?ikiNtu du:tʃui nai=do:
妻は、明日沖縄に行くので、1人になるよ。
- 3) na:tʃa naɸa=gatfi muduituni na:biʃiru ?aguʃi numa=jə:
明日沖縄に帰るから、今夜一緒に飲もうね。

次の用例では、つきそい文にさしだされる継続している動作や変化した後の結果的な状態が原因・理由になって実現する出来事がいいおわり文にさしだされている。

- 4) ma:=wa kuruma=nu tu:tuNtu ?o:ʃaN =do:

ここは、車が通っているので、あぶないよ。

5) na: niku nattuNtu gja:gja=wa na: nibutunu hadʒi

もう遅くなっているので、おじいさんは、もう眠っているはずだ。

次の用例では、つきそい文にさしだされる出来事がすでに実現した過去のことであり、いいおわり文とのあいだにある原因・結果的な関係があらわされている。

6) ʔuja=ga nibututaNtu ja:=neti=wa ʔagu=tu ʔafibaradana ʔattaN

親が眠っていたから、家では、友達と遊べなかった。

7) kinju ʔura=ga harotaNtu, hju:=wa waga haroi

昨日、あなたが払ったから、今日は、私が払う。

つきそい文の述語が形容詞になって、人や物の状態が原因としてさしだされる場合もある。

8) hju:=wa ʔifugaʃaNtuni, madʒini ʔikaraN

今日は忙しいから、一緒に行けない。

9) ʔunu ʔju:=nu ho:=nu ʔubasaNtu, ʔaNme ʃikkaN

この魚の皮が硬いから、あまり好きじゃない。

つきそい文の述語になる否定形式も-tu(ni)原因形をとることができる。次の用例のとおりである。

10) gja:gja=wa <ʔawamori>ʃikkaNtu, <ʃo:ʃu:>=be: ʔoifin

おじいさんは泡盛が好きじゃないから、焼酎ばかりめしあがる。

11) masanamuni=nu <ʔiNtone:ʃoN>natturaNtuni, nahi <reNʃu:> ʃiri

正名方言のイントネーションになっていないから、もっと練習しろ。

3.条件をあらわすつきそい・あわせ文

条件づけを表現するつきそい・あわせ文は、次の4つのタイプにわけることができる。定義は、かりまた（出版未定）のとおりである。

- 1)条件的なつきそいあわせ文： 条件となる出来事が状況や話し合いの場面のなかにあたえられていて、その条件的な出来事のもとに実現する出来事をいいおわり文に実現するつきそいあわせ文である。
- 2)仮定的なつきそいあわせ文： あたえられた場面や状況のなかから可能性としての出来事を話し手自らが設定した仮定的な条件のもとに、話し手の積極的な態度や意志を表明するつきそいあわせ文である。

- 3)前提的なつきそいあわせ文： 話し手がある出来事の実現、話し手の評価を前提としてつきそい文にさしだして、いいおわり文に話し手自身の意欲や意志をあらわしたり、聞き手への願いや命令をあらわしたりするつきそいあわせ文である。
- 4)契機的なつきそいあわせ文： つきそい文といいおわり文のあらわす2つの出来事が原因理由的な因果関係や条件づきの因果関係をあらわさず、2つの出来事のあいだの時間的な契機性をあらわす。

この4つのタイプにより、形式がことなる。正名方言には、7つの条件形がある。かならずしも上の4つの条件的なつきそいあわせ文のタイプによってこの7つの形式がきびしく使い分けられているとはいえないが、タイプによっていずれかが出やすいというような傾向はある。

3-1. -iwa 条件形を述語にもつ条件文

-iwa 条件形は、日本語のスレバ相当形式になる。当該形式は、主に条件的なつきそいあわせ文と契機的なつきそいあわせ文にもちいられる。

次の用例では、-iwa 条件形を述語にするつきそい文にさしだされる条件がいいおわり文のさしだす出来事の実現のための条件である。そういう意味でいいおわり文のさしだす出来事は、条件があれば実現し、なければ実現しない可能性としてポテンシャルな出来事である。

- 12) tʃu:=wa karada=nu ʔubisa:rja ʃugutu ʃirariN
人は、体が大きければ、仕事ができる。
- 13) ʔerabu=neti=wa muni kikiwa ʔuda=nu ʃima=kara kittʃaʔN=ka wakai
沖永良部では、言葉を聞けば、どこの集落から来たか分かる。
- 14) saki=dake ʔariwa nu:=mu ka:raN
酒だけあれば、何も要らない。
- 15) kusui numiwa noi =do=ja:
薬を飲めば、直るよね。
- 16) <reNʃu:>ʃirja dzo:di naimu
練習すれば、上手になる。

次の用例では、つきそい文にさしだしている条件がみたされず、いいおわり文の出来事が実現しなかったため、非リアルになる。

- 17) na: ʔunu gja:gja ʔafi mo:ʃi wurafiga, me:riwa na: hjaku ʔamai =ga
もうそのおじいさんおばあさん、亡くなって、いないけど、いらっしやればもう100才あまりよ。

- 18) ?ami=nu ɸutti ?arja hana=nu sattjanu hadzi
雨が降ったら、花が咲いたはずだ。
- 19) ?ari=ga ?unu tuki <fippai> fi: ?ariwa, me:tanu hadzi
彼がそのとき失敗したら、負けたはず。
- 20) nama fu:kja jukwattanu muN
今やっておけばよかったのに。
- 21) ?ura=ga tjanu <fitfidzi>=ni ?u:tfi kuririwa manioitanu muN
お前がちゃんと7時におこしてくれれば、間に合ったのに。

次の用例では、-iwa 条件形を述語にするつきそい文のあらわす出来事といいおわり文のあらわす出来事が条件づけ的な因果関係をもっておらず、その2つの出来事のあいだに時間的な契機性があるため、契機的なつきそいあわせ文になる。

- 22) na:tfa nariwa ma:=ne gumi=nu ?aN
明日になったら、ここにごみがある。
- 23) natfi nariwa hi:bi ?attjamu =djo
夏になったら、毎日暑いよ。

つきそい文の述語が否定形をとるばあい、-iwa 条件形が-nja としてあらわれる主に条件づけ的なつきそいあわせ文にもちいられる。-nja 条件形は、日本語のセネバ形式に相当すると考えられる。

次の用例では、条件づけ的なつきそいあわせ文である。

- 24) mja:=nu wuraNnja ɸa:tu=nu tudi ki:mu
猫がいなければ、鳥が飛んでくる。
- 25) <reNfu:> firaNnja dʒo:dʒi naramu
練習しなければ、上手にならない。
- 26) <ʔifa>=ni mittfi muroraNnja warusa nai =do:
医者に診てもらわなければ、悪くなるよ。
- 27) midi numaNnja tʃiburu jamiN
水を飲まなければ、頭が痛い。
- 28) kwa: natfi mjaNnja ?uja=nu ?uNgi=wa wakaraN
子供を生んでみなければ、親の恩義が分からない。
- 29) wakasa:nu tukini munugutu kaNge:raNnja tuʃi jutti=kara naNgi fiN =do:
若いときに物事を考えなければ、年をとってから難儀するよ。

次の用例は、仮定的なつきそいあわせ文に-nja 条件形の使用を示している。

- 30) ?ari=ga firaNnja, ?ura=ga firi =yo:
彼がやらなければ、お前がやれよ。

31) mumigutu naNnja gutfi ϕ ukkuna

問題がなければ、文句を言うな。

-nja 条件形に naramu (ならない) をくわえて、日本語のシナケレバナラナイに対応する義務をあらわす形式がつくられる。

32) ϕ uNnja narafiga, nama kittfuramu =djo

来なければならないが、まだ来ていないんだよね。

33) kibati <benkjo:> firaNnja naramu

頑張って勉強しなければならない。

3-2. -to 条件形を述語にもつ条件文

-to 条件形の使用範囲は、-iwa 条件形とほとんど同じであり、主に条件づけ的なつきそいあわせ文と契機的なつきそいあわせ文にもちいられる。話者の内省によると、-to 条件形が割りと最近できた言い方であるとのことである。日本語の影響でできた言い方であると考えられる。

次の用例は、条件づけ的なつきそいわせ文である。

34) nama <?o:dzumo:>=neti <saNpun> figitfi firuto=wa<gjo:dzi>=nu tumiN=sa

今大相撲で3分過ぎてやると、行事が止めるさ。

35) tjiNji ?uttuto jamiN

膝を打つと痛い。

36) saki numatfi mju:to ?unu tfu:=nu kimugukuru=nu wakai

酒を飲ませてみると、その人の心が分かる。

37) jo:janu muN jantu ?uri kamaNto=wa<koNdo> tfu:=nu wugibatte ?idzi wugi kamiN =gi:jo:

ひもじいもんだから、それを食べないと、今度人の砂糖きび畑に行つて砂糖きびを食べるわけよ。

次の用例で示しているように、契機的つきそいあわせ文にも -to 条件形がもちいられる。

38) wa: ϕ u:fi=nu jamuto=wa ?ami=nu ·ui =do:

私の腰が痛かったら、雨が降るよ。

39) ?e:da=nu tubuto=wa hadi ϕ ukkiN =do:

トンボが飛ぶと、風ふくよ。

-iwa 条件形と -to 条件形がことなる点として、つきそい文にさしだしている条件がないため、いいおわり文の出来事が実現しなかった場合にはもちいられない点がある。

40) × nama fu:kuto jukwattanu muN

今しておけばよかったのに。

否定形も-to条件形をとることがある。次の用例は、条件づけ的なつきそいあわせ文である。

- 41) kwa: natʃi mjaNto ʔuja=nu ʔuNgi=wa wakaraN
子供を生んでみなければ、親の恩義が分からない。

3-3. -tara 条件形を述語にもつ条件文

-tara 条件形は、仮定的なつきそいあわせ文と前提的なつきそいあわせ文にもちいられることが多い。

次の用例は、前提的なつきそいあわせ文であり、つきそい文の出来事の実現・実行を前提にして、話し手にとってのぞましい出来事がいいおわり文にさしだされる。いいおわり文に話し手自身の意欲や意志をあらわしたり、聞き手への願いや命令をあらわしたりする。

- 42) kwa:=nu hanaʃa ʔaNtara gutʃi ʔukkuna
子供がかわいいなら、文句をいうな。
- 43) nuitara numuna
乗るなら、飲むな。
- 44) mumigutu naNtara gutʃi ʔukkuna
問題ないなら、文句をいうな。
- 45) ʔari=ga ʃiraNtara ʔura=ga ʃiri=yo:
あいつがやらないなら、お前がやれよ。
- 46) jaʃiki hoitara ja:=nu hata ho:ri
宅地を買うなら、家の側を買え。
- 47) hani=nu ʔaNtara tudi ʔikibuʃa=ja:
羽があったら、飛んでいきたいね。
- 48) ʔura=ga ʔikiNtara wanu=mu ʔikiN
お前が行ったらおれも行く。

次の用例は、仮定的なつきそいあわせ文であり、つきそい文にさしだされる出来事が実現すると、話し手がのぞましいとする出来事の実現がいいおわり文にさしだされる。

- 49) ʔura=ga ʔari ʔoNmiNtara waga ʔura <ʃukudai> ʃiN=ga
お前が彼をなぐったら、おれがお前の宿題をするわ。
- 50) numiNtara nuNna
飲んだら、乗るな。

-tara 条件形は、条件的なつきそいあわせ文にももちいる。

- 51) ʔari=wa nama ʔo:saka=ne=du wuNtara ja:=ne=wa taru=mu wuranu hadʒi
彼は今大阪にいるのなら、家には誰もいないはずだ。

- 52) gaNnjanu kutu fiNtara ?ama=ga wafimikiN
 そんなことしたら、お母さんが怒る。
- 53) satta ?irikwa fiNtara ?utturuja ?amasa nai
 砂糖を入れすぎたら、非常に甘くなる。
- 54) fiNbuN miNtara nu:=mu wakai
 新聞を見たら、何でも分かる。

-tara 条件形は、動詞の過去形につくとき、つきそい文といいおわり文があらわす2つの出来事のあいだの時間的な契機性をあらわす。

- 55) ?agu=nu <?o:imi>di gaitfaNtara<hai> gaitfaN =gi=jo:
 友達が「オーイミ」と言ったら、「はい」言ったわけだよ。

3.4. -tukja 条件形を述語にもつ条件文

-tukja 条件形の使用は、-tara 条件形とまったく同じであり、元よりは、この2つの形式の使用は、地域差であると考えられるが、現在は、正名方言話者がいずれももちいるようになっている。

次の用例は、-tukja 条件形が前提的なつきそいあわせ文にもちいられる用例となる。

- 56) nuitukja numuna
 乗るなら、飲むな。
- 57) ?ari=ga firaNtukja, ?ura=ga jiri =yo:
 あいつがやらなければ、お前がやれよ。
- 58) mumigutu naNtukja gutfi ?ukkuna
 問題ないなら、文句を言うな。
- 59) jafiki hoitukja ja:=nu hata ho:ri
 宅地を買うなら、家の側を買え。
- 60) hani=nu ?aNtukja tudi ?ikibuja =ja:
 羽があったら、飛んでいきたいね。

次の用例は、仮定的なつきそいあわせ文である。

- 61) <?itfimaNeN>haroitukja wana: nu:=mu gajaN =do:
 一万円を払ったら、私は何も言わないよ。

次の用例は、つきそい文の述語が-tukja 条件形をとっている条件的なつきそいあわせ文の用例である。

- 62) ?ari=wa nama ?o:saka=ne=du wuNtukja ja:=ne=wa taru=mu wuranu hadzi
 彼は今大阪にいるなら、家には誰もいないはずだ。

-tukja 条件形は、-tara 条件形と同じく動詞の過去形につくばあい、つきそい文といいおわり文があらわす2つの出来事のあいだの時間的な契機性をあらわすこともある。

63) waga ?uri gaitfaNtukja ?ari=ga wafimitfamu

私がそう言ったら、彼が怒った。

64) gaNfaNtukja<sugu> ?ifi nagiratti=yo:

そうやったら、すぐ石をなぐられてね...

3-5. -kja 条件形を述語にもつ条件文

-kja 条件形の使用範囲は、-tukja 条件形と-tara 条件形と同じであるが、高年層の話者によると、元よりは、正名で-kja 条件形をもちいないそうであるが、現在は、正名の中年層のなかでもちいられるため、ここであつかうことにする。

次の用例では、-kja 条件形が前提的なつきそいあわせ文にもちいられる。

65) ?ura hima naNkja wanu nakautfi fira=i?

あなた暇ないなら、わたしナカウチしようか。

次の用例は、仮定的なつきそいあわせ文である。

66) haroikja waga <so:dzi> fiN=do:

払ったら、私が掃除するよ。

次の用例は、条件的なつきそいあわせ文の用例である。

67) <reNfu:> fiNkja dzo:dzi naimu

練習したら、上手になる。

動詞の過去形に-kja 条件形がつくばあい、契機的なつきそいあわせ文になる。

68) do:ka <hjo:dzuNgo>=fi hanatfi kuriri =di:fi faNkja ?unu ?atu=kara na: wakatamu =ditfi

どうか標準語で話してくれということをしたら、その後でもう分かったと。

3-6. -gafara 条件形を述語にもつ条件文

-gafara 条件形の使用範囲も-tara 条件形、-tukja 条件形、-kja 条件形と似ているが、契機性をあらわすのにもちいられない。話者によると、-gafara 条件形は、古い言い方であり、現在は、使用頻度が低くなっている。

次の用例は、前提的なつきそいあわせ文である。

69) ?ura=ga ?ikiNgafara wanu=mu ?ikiN

あなたが行くなら、私も行く。

- 70) kwa:=nu hanafa ?aNga fara gutfi φukkuna
子供がかわいいなら、文句を言うな。
- 71) nuiga fara numuna
乗るなら、飲むな。
- 72) figutu taNmiNga fara ?agu=gatfi taNmi
仕事を頼むなら、友達に頼め。
- 73) <nimotsu>muttiNga fara du:tfui=fji mutti
荷物を持つなら、1人で持て。
- 74) ?aro=neti ?afibiNga fara<bo:fj> haburi
外で遊ぶなら、帽子を被れ。
- 75) kuruma muttiNga fara saki=wa numaNkoi jiri
車を持つなら、酒を飲まないようにしろ。

次の用例は、仮定的なつきそいあわせ文である。

- 76) numiNga fara nuNna
飲めば、乗るな。

次の用例は、条件的なつきそいあわせ文である。

- 77) ?ari=wa nama ?o:saka=ne=du wuNga fara ja:=ne=wa taru=mu wuranu hadzi
彼は今大阪にいるのなら、家にはだれもいないはずだ。

3-7. -tu 条件形を述語にもつ文

過去形になっているつきそい文の述語が-tu 契機形をとるばあい、つきそい文といいおわり文があらわす2つのアクチュアルな出来事のあいだの時間的な契機性をあらわす。この形式は、過去形しかない。

- 78) waga mukafi=nu hanafi fa:tu ?ari=ga wafimitfamu
私が昔の話をしたら、彼が怒った。
- 79) waga ?uri kitt fatu ?ari=ga gaNfi narotfi kuritaN
私がそれを聞いたら、彼がこういう風に教えてくれた。
- 80) waga nibututatu ?ari=ni ?u:satti =jo:
私が眠っていたら、彼におこされてよ。
- 81) Nga wakaranu muN wakaramu=ditfi gajadina =di fa:tu, <jeNrjo> fji: gajaramu =ditfi...
なぜ分からないのに分からないと言わないか言ったら、遠慮して言えないと...
- 82) ja:=gatfi ?itt fatu ?ama=ga wuttaN
家に入ったら、お母さんがいた。

4. うらめ・ゆずり的なつきそい・あわせ文の述語形式

うらめ・ゆずり的なつきそいあわせ文は、原因・結果の関係が別の要因によって原因として正当にはたらかないことをあらわす。うらめ原因的な関係が事実的であって、つきそい文の出来事もいいおわり文の出来事もリアルであれば、うらめ原因的なつきそいあわせ文になり、うらめ原因的な関係が条件的であって、つきそい文の出来事がポテンシャルか、非リアルであれば、ゆずり状況的なつきそいあわせ文である。

4.1. 連体形+muN 条件形を述語にもつ条件文

うらめ原因的な条件をあらわすつきそい・あわせ文の述語には、連体形+muN 条件形が使用される。連体形+muN 条件形を述語にもつ文は、事実的なうらめ原因的な関係をあらわし、つきそい文にもいいおわり文にもリアルな出来事が表現される。肯定や否定、現在や過去、またはアスペクトをあらわす形式がすべて muN の前に来ることがある。

次の 83) の用例は、つきそい文の述語の形は動詞の非過去形であり、いい終わり文には、過去のリアルなできごとがあらわれている。

83) ma:ni=wa ?ari=ga ki:nu muN, kinju=wa fu:dana ?attaN

普段は、彼が来るのに、昨日は来なかった。

84) <koNdo>=wa wakja kwa:=nu <butai>=gatfi ?idzinu muN gja:gja=wa fu:mu=di

今度は、うちの子が舞台に出るのに、おじいさんは来ないそうだ。

次の用例のうらめ原因的なつきそい・あわせ文は、現在のリアルな出来事の因果関係をあらわし、つきそい文の述語は、継続相の形をとっている。

85) mu:ru tatt[unu muN] ?anu <se:to>=wa tattaN

皆立っているのにあの生徒は立たない。

86) ?unu ?ju:=wa tutti=kara tiNge tatt[unu muN] nama fidzuraN =ja:

この魚は、とってからしばらく経っているのに、まだ死んでいないね。

次の用例は、運動をおこなわないことがうらめ原因になり、つきそい文の述語の形が否定形になっている。

87) tfu:sa ?usuturanu muN kuruma=nu ?uNkinu gi:=nu ?aro:

強く押していないのに、車が動くわけがあるもんか。

88) ?ari=wa <zeNzeN> ?umut[fijumanu muN] Nga <tofokeN> kuriN=jo

彼はぜんぜん本を読まないのに、なんで図書券をあげるのか。

次の用例は、つきそい文の述語になる条件文は、過去形の連体形に muN をつけた形が、過去のリアルな出来事に関して因果関係をあらわす。

89) jumibu?a ?attanu ?umut[fjattanu muN], niga ?unagiti=jo?

読みたかった本だったのに、どうして捨てたか。

- 90) ?anu jagi finjaN=di fu:tanu muN nama fidzuraN=ja:
あのヤギ死のうとしていたのに、まだ死んでいないね。

4.2. -taNte 条件形を述語にもつ文

-taNte 条件形もつきそい文の述語につかわれて、ゆずり状況的なつきそいあわせ文をつくっている。いいおわり文のできごとがのぞましくないばあいに-taNte 条件形が用いられる傾向が見られる。

- 91) ?uri=fi <keNfu:>faNte=wa nu:=mu tʃuburu=ni ?jaN
それで研修しても何も頭に入らない。
92) ?ikja: faNte firamu
どうしてもやらない。

4.3. -timu 条件形を述語にもつ文

つきそい文の出来事が実現するにもかかわらず、いいおわり文の出来事がそれに影響を受けずに、前と同じく成立するばあいに、つきそい文の述語が-timu 条件形をとる。このとき、つきそい文の出来事もいいおわり文の出来事もポテンシャルである。

- 93) wunagu=wa ?ikja:sa hataratʃimu<kju:rjo:>=wa ?agaramu
女はいくら働いても、給料はあがらない。
94) jinna =ditʃi gaitʃimu ʃiN =do=ja:
するなと言ってもするよね。
95) satta ?iritimu ma:ku naN
砂糖を入れても、おいしくない。
96) ʃigutu ?ibiritimu ʃi:=du ʃiN =do:
仕事を飽きても、するんだよ。
97) ?ikjasa mutʃikasattimu ʃi: miN =ga
いくら難しくてもやってみるわ。

-timu 条件形に jukkwa mu (よい) をくみわけて、許可をあらわす形式がつくられる。

- 98) nibutimu jukkwaN =do:
眠ってもいいよ。

4.4. -adanamu 条件形を述語にもつ文

-adanamu 条件形を述語にもつ文は、-timu 条件形の否定形であり、つきそい文の述語が否定形式になるばあいにもちいられる。

- 99) <kaNdʒi>jumaradanamu ʃigutu ʃirariN
漢字が読めなくても仕事できる。

100) ja:danamu dariraN

座らなくても疲れない。

4.5. -abamu 条件形を述語にもつ文

-abamu 条件形を述語にもつ文は、-timu 条件形を述語にもつ文とかさなる部分が多いが、正反対、あるいは類似の意味のことがらを重ねて述べ、「どのようなことをしても・何があっても」というニュアンスでもちいられる傾向がみられる。

101) ?akkabamuwudurabamu jukkwantu tʃa:ma=wa <ʔundo> ʃi: jaseri

あるいても走ってもいいから、少しは運動して痩せろ。

102) <ʔoranda>tʃu jarabamu, ʔerabutʃu jarabamu mu:ru junu niŋgiN =dja

オランダ人であっても、沖永良部人であっても、皆同じ人間だ。

103) ta:sa ʔarabamujasa ʔarabamu ho:ri

高くても安くても買え。

まとめ

沖永良部語正名方言の条件をあらわす形式と条件文を分析した上で、今までの琉球諸語の研究にとりあげられていないいくつかの特徴が見えてくる。

契機性をあらわすには、他の条件文に用いられない独自の形式がある。**-tu** 契機形は、**-tu** 原因形と元は同じであり互いに用法がことになってきたと考えられる。

当該方言は、沖縄語（かりまた出版未定）とことなり、条件をあらわすつきそのの述語になる形式が前提的条件と仮定的条件によって形式が使い分けられる傾向がみられない。両方が**-tara**、**-tukja**、**-kja**、**-gajara**によって表現され、この4つのなかで一つが話者の内省によって「一番適切」とされるわけではない。同じ用法をもつ形式が4つある原因は、おそらく正名方言とその周辺の方言との接触によると考えられる。**-kja**は、高年層の話者に「よその言い方」とされる。**-tara**、**-tukja**、**-gajara**もかつて地域差であったと考えられる。高年層の話者を中心とする、この形式の地理的分布の調査が必要である。

条件形の分析によって沖永良部語と日本語との接触がはっきり見える現象もいくつか見えてきた。次にその例を2つあげる。

-to 条件形は、他の北琉球語群の変種には見られない形式である。日本語のト条件形の影響できたものであると言ってよかろう。日本語の**-to** という形態素が借用され、正名方言の動詞の旧連体形につけられるというのは、日本語の形態素がそのまま琉球諸語の語形につけられる珍しい例である。

ゆずり条件形をあらわす**-timu** 条件形と**-abamu** 条件形は、話者の内省によると前者が新しい言い方で後者が古い言い方であるということから**-timu** が日本語のテモ条件形の影響でできた言い方だと考えてよかろう。そうであれば、正名方言の**-timu** 条件形が日本語の

構造を正名方言に存在する形態素をもちいてまねられたものであり、Heath (1984 : 367-368) が定義した *structural convergence* (構造収束) の一例であると言ってよい。

【注記】

¹⁾ コピュラの第一叙述形は、jaN であるが、接続詞か終助詞 sa がつくときだけあらわれる。

【参考文献】

奥田靖雄 (1986) 「条件づけを表現するつきそい・あわせ文—その体系性をめぐって—」 『教育国語』第 87 号。

狩俣繁久 (2007) 「宮古保良方言の条件形」 『南東文化』 沖縄国際大学南東文化研究所紀要、第 29 号。

狩俣繁久 (出版未定) 「初めての人のためのシマクトゥバの文法」。

町博光 (1983) 「対他的条件法と対目的条件法—与論朝戸方言・国頭宇嘉方言を例として—」 『広島女子大学部紀要』 18 号所収、S58・3。

Heath, J.G. (1984) *Contact and Language Change*, *Annual Review of Anthropology*. (Vol. 13, pp. 367-384).